

教職課程におけるケアの位置づけ ーノディングズのケア論の観点からー

The Significance of Care in the Course of Study : From the View point of Noddings' Theory of Care

小川 雄

要旨

本稿の目的は、アメリカの教育哲学者であるネル・ノディングズ (Nel Noddings, 1929-) が唱導しているケア論に依拠しながら、教育課程におけるケアの意義を露わにすることにある。

最新の学習指導要領が際立たせているように、現在の教育課程は、「学びに向かう力、人間性等」を涵養できるように編成しなければならない。すなわち、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」の養成が学校教育の喫緊の課題である。

ノディングズのケア論は、本稿が明らかにするように、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」をいったいどのようにして育めばよいのかという問いにかんして、一つの知見をわたしたちに授けてくれる。

そこで本稿では、ノディングズの言説に従いながら、ケアするひととしてのわたしたちのあり様を究明し、「学びに向かう力、人間性等」の具体的な内実とそれを涵養するための手立てを「ケアリング」の観点から露わにしたい。

キーワード：学びに向かう力・人間性等 受け容れ ケアリング ケアリングの連鎖
最善の自己 道徳的心情

はじめに

本稿の目的は、アメリカの教育哲学者であるネル・ノディングズ (Nel Noddings, 1929-) が唱導しているケア論に依拠しながら、教育課程におけるケアの意義を露わにすることにある。

学習指導要領に倣って言えば、教育課程は「学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した各学校の教育計画である」(小学校指導要領総則編 11, 2018)¹。この理解からすると、教育課程を編成するためには、なによりもまず、学校教育が達成すべき目的や目標を設定しなければならない。それゆえ、教育課程を編成するにあたって、わたしたちはまずこう問わなければならない。学校は子どもたちになにを身につけさせるべきであるのか、と。

この問いにかんして、最新の学習指導要領が際立たせているのは、「学びに向かう力、人間性等」(小学校指導要領総則編 11, 2018) の涵養である。たしかに、学習指導要領は、これ以外にも、学校教育が育むべき「資質・能力」として、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力」の育成を挙げている (小学校指導要領総則編, 2018)。しかし、これら「三つの柱」

神戸親和女子大学非常勤講師

のなかでも、「学びに向かう力、人間性等」は、「他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素」として位置している（小学校指導要領総則編，2018）。学習指導要領の見直しにもあるように、これからの社会は、「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等」により、「予測が困難」かつ「厳しい挑戦」の時代を迎える（小学校指導要領総則編，2018）。このような時代のなかで子どもたちは、すでに習得した知識や思考法が通用しなかったり独力では解決が困難であったりするような、複雑で新奇な課題に直面するかもしれない。学習指導要領が「学びに向かう力、人間性等」を教育目標として強調しているのは、こうした背景からである。すなわち、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」は、「直面した困難への対処法」を見出すことにつながる（小学校指導要領総則編，2018）。かくして、こうした「情意や態度等を育てていくこと」（小学校指導要領総則編，2018）が学校教育の喫緊の課題である。

本稿でノディングズのケア論を取り上げるのは、それが当の課題に取り組むための理論的な枠組みを提供してくれるからである。すなわち、ノディングズのケア論は、本稿が明らかにするように、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」をいったいどのようにして育てばよいのかという問いにかんして、一つの知見をわたしたちに授けてくれる。

本稿では、まず、ノディングズのケア論の基本的な枠組みを確認しながら、わたしたちの人間関係が「ケアリング」（Caring 4, 2003）² という結びつきに立脚していることを証示する。その考察から明らかになるのは、つぎのような見解である。すなわち、「ケアリングの連鎖」によってケアの対象が「同心円」的に増えていくことで、わたしたちの人間関係はいっそう広がっていく、と。しかし、この見解は、裏を返せば、わたしたちは「ケアリングの連鎖」が成立しないまったくの他人をケアできないということでもある。ノディングズは、ほんとうにこのような主張を打ち出しているのであろうか。その正否を確かめるために、本稿は、ノディングズの言説に従いながら、ケアするひととしてのわたしたちのあり様を究明する。さいごに、こうした考究を踏まえて、「学びに向かう力、人間性等」の具体的内実とそれを涵養するための手立てを「ケアリング」の観点から露わにしたい。

1 ケアリング

ノディングズによれば、つぎの事例の母親がケアするひとの典型である。すなわち、夜泣きをしているわが子にたいして、「わたしは自然にわが子の苦痛を和らげたいと思う」（Caring 17, 2003）という心情から反応している母親である。この事例のように、ケアするひとは、ほかのひとを気づかい配慮する。言い換えれば、「そのひとが感じていることをできるだけ綿密に」感じとろうとしている。ノディングズは、このような態度を「受け容れ」（receiving）（Caring 30, 2003）ということばで特徴づけている。すなわち、当の態度は、ほかのひとの表情やことばがわたしたちのこころのなかに生起させるさまざまな思いや感じに関して、それらを現れるがままにしておくという意識の様態である（Caring 34, 2003）。

ノディングズは、このような受容的な態度をとっているときに起こる経験を、自らの体験に

基づいてこう報告している。ある同僚のことばを聞いたとき、わたしは、感動して「あたかも、かれの目とわたしの目が一体となって、そのひとが描く情景を見ているかのようであった」(Caring 31, 2003)、と。この言説を踏まえれば、ケアするひとは、「ほかのひととともに見たり感じたりしている」(Caring 30, 2003) ような一体的な感覚を享受しながら、そのひとの心情に到達している。それゆえ、ケアするひとにとって、自分がケアしている相手の苦痛は、それが自分の痛みであるかのように迫ってくる。ノディングズは、そのときのケアするひとの心情をつぎのように言い表している。「まるで自分自身の苦しみを取り除きたいかのように、そのひとの苦しみを取り除きたい」(Caring 82, 2003)、と。ケアするひとは、このような切迫した思いに突き動かされて、当該の苦痛を和らげるための具体的な行為に着手するのである。

夜泣きをしている子どもの様子から「どこか具合が悪い」と感じとった母親は、その子どもをあやしたりおしめを取り替えたりする。このように、ケアするひとは、受容的な態度を経た後で、ある行為をとおして、ケアしている対象に働きかけようとする。だから、ケアには、その態度に引き続いて、たとえば世話のような、具体的な行動が伴う。このような行為としてのケアに対して、ケアされている側はさまざまな「応答」をする (Caring 72, 2003)。たとえば、母親から世話されている子どもは身をよじて喜ぶ。ノディングズがケアされる側からのこのような「応答」をケアするひとにとっての「贈り物」(Caring 72, 2003) と表現していることから分かるように、ケアするひとは、当の「応答」に「しばしば、深くて抑えきれない喜びを経験する」(Caring 6, 2003)。ノディングズの述定にもあるように、わたしたちは、「わたしたちに喜びをもたらすものには直接的に触れ続けたい」(Caring 132, 2003) と思う。それゆえ、母親は、自分のケアに対してわが子が「応答」を返したとき、その子どもをいっそう愛おしく感じる。このように、ケアしケアされる関わり合い、ノディングズのことばを借りれば、「ケアリング」は、わたしたちの間の感情的なつながりをいっそう緊密にして、人間関係を充実させていく。

2 ケアリングの連鎖

たとえば、わたしたちの愛娘がわたしたちの知らない若い男と将来夫婦になる誓いを立てたとしよう。わたしたちは、その将来の娘の夫をはじめは信用できないかもしれない。しかし、娘とその男が実際に深く愛し合っているとわかれば、わたしたちは、当の男を、あらたな家族の一員として認められるようになる。ノディングズは、このような人間関係の拡がり「ケアリングの連鎖」(chains of caring) (Caring 47, 2003) として捉えている。すなわち、わたしたちと娘との間に存立している「ケアリング」が、娘を結節点にして、娘とくだんの男とのあいだにある「ケアリング」と接続すると、わたしたちが娘に寄せている愛情は、この連絡を通して、その男にも移っていく。すると、わたしたちは、ケアするひととして将来の娘の夫を自然に受け容れられるようになる。このように、わたしたちの人間関係は、「ケアリングの連鎖」をとおして、わたしたちを中心とする「同心円」(Caring 46, 2003) を描きながら少しずつ拡大していくのである。

この理解に立てば、わたしたちがケアできるのは、すでに出来上がっている「ケアリング」

に連鎖的に連なるひとびとである。だから、愛するひとがわたしたちの子どもをみごもれば、その子どもは、「潜在的なケアされるひととしてわたしの人生に入り込んでくる」(Caring 47, 2003)。しかし、その一方で、わたしたちの「ケアリングの連鎖」から外れているひとびとは、わたしたちのケアの対象には入ってこない。たとえば、玄関先でたまたま出くわした見知らぬ迷子に対しては、わたしたちは警戒心を抱くけれども、同情や親切心はなかなか湧き上がってこない。なぜなら、その子どもは、わたしたちの「同心円」のなかに位置づけられない、まったくの他人であるからである。それでは、わたしたちがなんの関わりもない他人とケアしケアされる関わり合いを取り結ぶのは、不可能なのであろうか。この問いかけに対して、ノディングズはこう主張する。その可能性はわたしたちの「ある努力」によって開かれる (Caring 80, 2003)、と。

ノディングズに従えば、わが子であれ見知らぬ迷子であれ、ほかのひとがわたしたちに助けを求めているのを認めると、そのとき、わたしたちは、ケア「しなければならない」という内的な声」に捕らえられている (Caring 47, 2003)。当のひとがわが子のような親密なひとであれば、わたしたちは、この命令に対してケア「したい」という心情で応答しながら、そのひとを受け容れて、ケアするひととして手を差し伸べようとする。しかし、助けを乞うているひとが見知らぬ迷子のような赤の他人である場合、ケア「したい」という気持ちはわたしたちに生じてこない。それどころか、わたしたちは、ケア「しなければならない」という拘束から逃れようとする。だから、ノディングズが述べていたように、わたしたちが無関係なひととケアしケアされる関わり合いを営むためには、「ある努力」が必要なのである。すなわち、その努力の内実は、「しなければならない」という呼びかけから耳を塞ぐのではなく、それに敢えて付き従おうとする「努力」である。とはいうものの、このような「努力」がなぜわたしたちに可能なのであろうか。その理由を探らなければならない。

3 最善の自己

ノディングズによれば、わたしたちは、ケア「しなければならない」けれどもわたしは「したくない」(Caring 80, 2003)と感じているとき、わたしたちのここには、「ケアされたりケアしたりしたもろもろの瞬間」が蘇っている (Caring 80, 2003)。言い換えれば、わたしたちのこのころのなかには、ほかのひとの窮状に自分が駆けつけてそのひとの役に立ったという「わたしがケアした瞬間」(Caring 80, 2003)が立ち現れる。あるいは、自分が苦しかったときとか辛かったときとかにだれかがわたしに寄り添ってくれたという「わたしがケアされた瞬間」(Caring 80, 2003)が浮かび上がってくる。

しかも、ケアにかんするこうした記憶は、そのときの情感を再現する。すなわち、相手を助けた場面での「万事うまくいっている」(Caring 37, 2003)という感じとか、ほかのひとから必要を満たしてもらったときの「安寧」(Caring 24, 2003)とかである。すると、わたしたちは、ケアしたりケアされたりする関わりに付随する、こうした肯定的な情感に誘われて、その情感を生起させている「ケアリング」を「よい」(Caring 49, 2003)として見とおすようになる。この把握に鑑みれば、ケアを差し控えようとしている現在のわたしたちは、そうした望ましいあり様から遠く離れている。逆に言えば、ほかのだれかとともに「ケアリング」に参画し

ている過去のわたしたちのように、目の前にいる相手にケアするひととして向きあえば、わたしたちは、みずからが認めた申し分のない状態に近づいている。

こうして、ケアするひととしてふるまうことに躊躇しているとき、わたしたちのころのなかで、そのひとにケアするひととして相対している自分の姿が「最善の自己」(Caring 80, 2003)としてかたちをとりはじめる。すると、わたしたちに助力を求めている当のひとを冷たく突き放してしまえば、わたしたちは、みずからが思い浮かべている「よさの描像」(Caring 49, 2003)を自分の手で切り崩してしまうことになる。だからこそ、わたしたちは、「最善の自己」という描像から、ケア「しなければならぬ」という命令を引き受ける「べきである」(Caring 83, 2003)という呼びかけを感じとるのである。

ノディングズの述定にあるように、「最善の自己」からのこの指令には絶対的な拘束性はない。それゆえ、わたしたちは、「べきである」を無視して、「しなければならぬ」というはじめに感じた義務的な心情を黙殺できもする。しかし、ノディングズはこう明言する。「ケアリング」に「関係づけられ、関係づけられたままでありたい」という欲求が十分に強ければ、わたしたちは、「最善の自己」からの「べきである」を拒絶することはない(Caring 83, 2003)、と。

わたしたちが「ケアリング」にまつわる過去の記憶を「よい」体験として想起しているとき、「ケアリング」は望ましい結びつきとしてわたしたちに立ち現れている。この望ましさをかたちづくっているのは、実際に参画した「ケアリング」に付随するよろこばしい情感である。言い換えれば、そのような情感に導かれて、わたしたちは「ケアリング」を「よい」あり方であるとして感得している。だから、当の情感が鮮烈であればあるほど、わたしたちが「ケアリング」に対して感じている望ましさは強まる。すなわち、これまでの「ケアリング」が充実していればいるほど、「ケアリング」を求めるわたしたちの気持ちは高まる。したがって、「最善の自己」の命令にわたしたちが従おうとするかどうかは、過去に体験した「ケアリング」がどれほど充実していたかに懸かってくる。

4 学びに向かう力、人間性等の内実

これまでの考察に従えばこうである。わたしたちは、ケア「しなければならぬ」という内的な声を、そう「したくない」として拒絶できもする。しかし、そのようにして拘束から逃れようとしているとき、わたしたちは、これまでの「ケアリング」の体験から立ち現れてくる「最善の自己」に捕らえられている。すなわち、わたしたちは、その自己のもとで、はじめの命令を受諾「すべきである」と感じている。「ケアリング」に「関係づけられ、関係づけられたままでありたい」という欲求を支えにしながら当の心情に身を委ねることができたとき、わたしたちは、ようやく、ケア「しなければならぬ」という指令に服して、助けを求めているほかのひとをケアするひととして受容できるのである。

1で見たように、ケアするひとは、気づかいに基づいた配慮をとおしてほかのひとと関わろうとする。わたしたちは、このような仕方で行為できるひとを、思いやりがあるとか献身的であるとかとして、道徳的に高く評価する。それゆえ、ケアするひとというあり様は、「道徳的である」ということばの通例の理解と合致すると言える。すると、わたしたちをケアするひと

という道徳的なあり方に近づけているさきの二つの心情、すなわち、「すべきである」という義務的な心情と「関係づけられ、関係づけられたままでありたい」という欲求は、ノディングズの述定にあるように、「真正の道徳的な心情」(Caring 83, 2003)である。3で明らかにしたように、わたしたちは、こうした心情を、これまでの「ケアリング」をとおして培っている。だから、「道徳性への傾向と関心は、ケアリングから出てくる」(Caring 83, 2003)。しかも、そうした「ケアリング」の体験は、2で獲得した視座からすると、「ケアリングの連鎖」からなる「同心円」のなかでわたしたちが営んでいる、自然で日常的なケアしケアされる関わり合いである。かくして、ノディングズの枠組みでは、わたしたちの道徳性の基礎は「ケアリング」にある。

上述したように、ノディングズが際立たせている道徳的な心情の一つは、ケア「しなければならない」という内的な拘束に服従する「べきである」という義務的な心情である。この思いは、ケア「したくない」と感じているわたしたちをケアするひとへと導こうとしているので、統制的である。この点に鑑みれば、当の心情は、『学習指導要領』にある「自己の感情や行動を統制する力」の内容と言ってよい。しかも、わたしたちが、当の義務的な心情に付き従ってケア「しなければならない」という責務を受諾し、まったく関わりのない他人をケアするひととして受け容れることができたとき、わたしたちとそのひととのあいだに「ケアリング」という「よい」関係が生じてくる。この理解からすると、『学習指導要領』の言う「よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」は、「ケアリング」に「関係づけられ、関係づけられたままでありたい」という気持ちであると言える。というのも、すでに明らかになっているように、この欲求が強ければ強いほど、わたしたちは、「ケアリング」という「よい」関係を切り開く「べきである」という義務的な心情にすすんで従おうとするからである。

このようにして、「自己の感情や行動を統制する力」と「よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」は、ノディングズのケア論に基けば、二つの「道徳的な心情」として把握できる。うえで指摘したように、この心情を培っているのは、「自然なケアリング」である。したがって、子どもたちにこれら二つを身につけさせようと思えば、教師は、教師と子どもたち、あるいは、子どもたちどうしですでに営んでいるケアしケアされる関わり合いがいっそう充実するように、子どもたちに接していなければならない。そのために、ノディングズは、『学校におけるケアの挑戦』のなかでこう提案している。教師は、子どもたちが切実に感じている必要と興味に十分に関心を払うべきである (CCS 35-36, 2005)³、と。

教師がこのようにケアするひととして子どもを受け容れることは、子どもの道徳性を高めるだけではない。ノディングズによれば、「ケアリングの関係が、子どもたちにあらゆる種類の経験と主題に対するはじめの受容性を備えさせる」(CCS 36, 2005)。すなわち、子どもたちと教師とのケアしケアされる関わり合いは、子どもたちのなかに、その教師が教えようとしている事柄に習熟したいという欲求をもたらす。この洞察に従えば、『学習指導要領』の「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力」を形成しているのも、やはり「ケアリング」である。

おわりに

本稿では、ノディングズのケア論に依拠しながら、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」の内実とそれらを育む手立てについて考究した。

すなわち、

- ①「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力」：4でノディングズとともに確認したように、子どもたちは「ケアリング」のなかで学びへと向かう。だから、子どもたちのこの力を高めるためには、教師自身が子どもたちに対してケアするひととして関わり、子どもたちとのあいだの「ケアリング」を充実させなければならない。
- ②「自己の感情や行動を統制する力」：3で究明したように、ケア「しなければならない」けれどもそうしたくないというわたしたちの葛藤を「しなければならない」へと傾けさせるのは、わたしたちの「最善の自己」が発する「べきである」という指令である。「最善の自己」は、「ケアリング」にまつわるわたしたち自身の体験から立ち現れてくる。それゆえ、当の力の源は、これまでの「ケアリング」である。
- ③「よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」：3の述定に従えば、わたしたちは、過去の「ケアリング」を思い起こしているとき、そうした体験に付随するよろこばしい情感に誘われて、当の結びつきを「よい」として認める。だから、あるほかのひとに対してケアをためらっているわたしたちのあり方よりも、そのひとをケアするひととして受け容れて「ケアリング」を成就させているわたしたちのほうが、「よりよい生活」を営んでいると言える。この生活を追求する態度をかたちづくっているのは、「ケアリング」に「関係づけられ、関係づけられたままでありたい」という欲求である。この欲求は、これまでの「ケアリング」が充実していればいるほどいっそう高まっていく。

こうした解析から見て取れるように、これら三つの力の基底にあるのは「ケアリング」という結びつきである。それゆえ、ケア論の観点から言えば、この関係が生じやすい教育環境の整備が急務である。そのような環境を実現させる手立てとしては、『学習指導要領』が提起しているように、「教科等横断的な視点で教育課程を編成・実施」という工夫がある（小学校指導要領総則編 35, 2018）。すなわち、このやり方に従えば、たとえば、「心身の健康の保持増進教育」のような、子どもたちの関心と結びついている主題を教育課程のなかに設定して、その主題の下で、各教科の学習項目を相互に関連させながら取り決めることになる（小学校指導要領総則編 238, 2018）。教師がこのような工夫を実践すれば、子どもたちは、各教科の授業を受けながらこう感じる。自分は教師からケアされている、と。このような仕方でケアしケアされる関わり合いをつねに保ちながら、「ケアリング」を充実させていくことで、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」が子どもたちの中で培われていくのである。

参考文献

学習指導要領

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社 平成30（2018）年2月

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社 平成30（2018）年3月

研究文献

山田雅彦編著『教育課程論 第2版』学文社 2018年

西岡加名恵編著『教育課程』協同出版 2018年

林泰成編著『ケアする心を育む道德教育 伝統的な倫理学を超えて』北大路書房 2000年

註

- 1 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 平成29年7月』東洋館出版社 平成30（2018）年2月 本著作からの引用と参照に関しては、これを小学校指導要領総則編と略記し、該当頁数と出版年を併記する。
- 2 Nel Noddings *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*. Berkley: University of California Press, 1984, 2003. 本著作からの引用と参照に関しては、これを *Caring* と略記し、該当頁数と第二版の出版年を併記する。
- 3 Nel Noddings *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education*. NY: Teachers College Press, 1992, 2005. 本著作からの引用と参照に関しては、これを CCS と略記し、該当頁数と第二版の出版年を併記する。